

書評

鈴木 舞 著

殷代青銅器の生産體制

——青銅器と銘文の製作からみる工房分業——

丹 羽 崇 史

一 はじめに

本書は、「殷代における青銅器生産のあり方の復元」（本書「はじめに」）を目的として、青銅器やその銘文を資料として考古學的検討をおこなった内容となっている。本書は、著者が二〇一五年三月に東京大學大学院人文社會系研究科に提出した博士學位論文をもとに、加筆・修正を加えて刊行されたものである。著者は、本書第三章に所収の「湖北盤龍城遺蹟における青銅禮器の生産——青銅爵・鼎・罍を中心に——」（『中國考古學』第十三號）で第四回日本中國考古學獎勵賞を受賞し、当該分野においては新進氣鋭の若手研究者と言えるであろう。まず、本書の全體的な構成を示したのち、各章の内容を整理して概要を示す。そのうえで、本書の意義について述べ、最後に評者の感想を示したい。なお、評者が氣づい

た問題点について、各章の個別の点に關しては「二、本書の構成・内容」で述べ、全體にかかわるものに關しては「四、本書の問題点」で述べることにしたい。

二 本書の構成・内容

本書の構成は、次の通りである。

はじめに

第一章 殷代青銅器生産研究の現状と課題

第二章 鄭州商城における青銅爵の製作

第三章 盤龍城遺蹟における青銅容器の製作

第四章 殷墟青銅器銘文の字體と工房

第五章 殷代青銅武器銘文に關する考察

第六章 殷代における青銅器生産

あとがき

第一章で先行研究と問題の所在、方法の提示をおこない、第二章・第三章で二里岡期における鄭州商城と盤龍城遺蹟の青銅器生産、第四章・第五章で殷墟における青銅器銘文の製作をそれぞれ検討・考察したのち、第六章にて殷代全體の青銅器生産の變遷についてモデルを提示した内容となっている。

「はじめに」において、著者による各章の概要が述べられているが、評者の理解をあきらかにするため、以下、本書の

内容について紹介する。

第一章では、先行研究の整理をもとに本書の方針を示す。まず、殷墟遺蹟、鄭州商城、盤龍城遺蹟といった本書で検討対象とする遺蹟、ならびに本書が立脚する編年について先行研究の成果を紹介する（第一節・第二節）。次に、①二里岡期における鄭州商城とそれ以外、特に盤龍城遺蹟における青銅器生産のあり方、②殷墟遺蹟の構造と青銅器生産、③西周時代との對比による殷代の青銅器生産、④殷代における青銅器製作者集團の組織、といった殷代の青銅器生産に關する先行研究について整理を試みる。そのうえで二里頭期と西周時代の青銅器生産に關する研究についても觸れている。また、文獻史料、出土文字資料の研究によつて提示されてきた製作者集團の構造について述べ、氏族制のもとで氏族による器種や工程ごとの分業體制の存在を想定する説を紹介する（第三節・第四節）。評者は、青銅器製作者集團の組織や構造といった考古學と文獻史學、出土文字資料研究とで共有される問題を扱うのであれば、單に羅列するのではなく、それぞれの方法論や見解の違いをこの場で整理をする必要があつたのではないかと考える。

次節では問題の所在を整理する。殷代において「體系立てられた「生産體制」と呼べるようなものであつたのかという點についてあらためて考えてみる必要がある」（本書二三頁）とし、青銅器生産の検討への方法として、（一）青銅器製作者の動向からのアプローチ、（二）製作工房および製作地からのアプローチがあることを述べる。前者については、「本書では殷周青銅器特有の紋様以外の屬性、つまり器種・器形や銘文などに關する検討も試みることで、製作者全體の様相の復元を試みる」（本書二三頁）とし、後者については「一遺蹟内における複数の製作工房、また複数の遺蹟に立地した製作工房から考えるということは、一言でいえば分業のあり方を明らかにすること」（本書二四頁）として、本書の検討の方向性を述べる。そのうえで本書では、一定数の青銅器と鑄造關係遺物・遺構が出土している鄭州商城・盤龍城遺蹟・殷墟遺蹟の出土品を中心に検討するとした。著者は青銅器生産を「いくつかの異なるレベルにおける分業の積み重ね」（本書二四頁）と捉え、①製作工程上の分業、②用途・器種別分業、③異なる遺蹟に立地する工房間での分業の三段階を想定する。

①を工房分業、②③を工房間分業とする。①については紋様・銘文の検討からアプローチするとし、②については遺蹟内の鑄型の分布状況、③については盤龍城遺蹟での在地生産を立證するとしている。なお、著者は分業の三段階について右のように定義をしているが、「③一遺蹟内に併存する複数の工房間での分業」(本書二四頁)、「三つ目に挙げた、一遺蹟(群)内における複数の製作工房間での分業」(本書二五頁)などとも述べており、③の定義が一致しない^①(第五節)。

最後に青銅器の製作工程と鑄造關係遺物について述べ、青銅器の製作據點を考えるうえで「鑄型は青銅器製作以外での使用法が考えられない」(本書二七頁)ことから鑄型を青銅器製作のおこなわれた場所の第一の指標とするとした。最後に本書で用いる「生産」、「工房と製作地」、「製作者」といった用語について著者の定義を述べる(第六節・第七節)。

第二章では、東京大學文學部列品室所藏青銅爵(以下、東大所藏爵とする)二點を手掛かりに、二里岡期における青銅爵の生産の變遷について検討する。東大所藏爵の特徴を紹介したのち、二里岡期青銅爵の編年を検討し、東大所藏爵の年代ならびに製作技法上の位置づけを述べる。二里岡期青銅爵は器形・紋様・製作技法の面で三系統に分かれ、東大所藏爵のうち一點は鑄型構造や鑿の製作技法の面で二里頭期と二里岡期の兩方の要素が見られるもの、もう一點は二里頭期の技法で製作されたものになるという。二里岡期においても、「夏」の製作者が青銅器生産に従事していたと推測する。また、鄭州商城に所在する南關外、柴荊山北の工房遺蹟における鑄型の分布状況を検討した結果、同一地點に工具・武具・容器などが混在していることから、「工房という一單位内においては、製作する器種にかかわらず、製作者たちはかなり自由な行き來をしていたのではないか」(本書五二頁)と推測する。なお本章末には、二里頭期・二里岡期の青銅爵一覽が掲載されているが、當該期の青銅器生産體制を検討するのであれば、鄭州商城や第三章で検討する盤龍城遺蹟以外の遺蹟出土品も含めて検討してほしかったと感じるのは評者のみであろうか。

第三章では盤龍城遺蹟出土の青銅器について検討し、盤龍城遺蹟における青銅器生産のあり方について考察する。所謂「地方型青銅器」や盤龍城遺蹟出土青銅器についての先行研究を整理し、これまでの研究では盤龍城遺蹟の青銅器に對し

て「鄭州からの搬入品あるいは在地生産という二者擇一の回答」(本書六二頁)がなされており、本書では「鄭州商城出土青銅器との相違点を指摘しつつ、盤龍城遺蹟出土青銅器群のなかに鄭州に由來する青銅器と在地生産された青銅器が併存することを立證する」(本書六二頁)とした。まず紋様の分類・編年を示したのち、爵・鼎・罍の主要三器種の形態をもとに四期に編年する。次に各器種の紋様、セット關係、製作技法(範線構造・鑄掛など)にみられる特徴を整理し、盤龍城遺蹟出土青銅器には、①中原、特に鄭州商城からの搬入品、または鄭州商城の技術者あるいは製作技術の完全導入、②鄭州商城のスタイルの再現を目指しながらも、一部に独自の紋様や技術が導入されたもの、③鄭州商城には存在しない形態の三種類があるとし、前者を「鄭州系青銅器」、後二者を「非鄭州系青銅器」と稱する。さらに二里岡期においては、鄭州商城や盤龍城遺蹟以外の五遺蹟で鑄造關係遺物・遺構が出土していることから、「殷前期における青銅容器の生産状況はこれまで考えられてきたより複雑なかたちであった可能性が高い」(本書八五頁)と指摘する。最後に、盤龍城遺蹟出土の青銅器は、セット關係、型式や紋様が鄭州商城と類似する點が多く、共通した「祭祀を行う際の道具として、盤龍城の人々は自ら青銅容器の鑄造を行っていたと考えられる」(本書八六頁)とした。なお第二章についても言えることだが、青銅器編年については、先行研究との違いを對照表などで明示してはしなかった。

第四章では、殷後期の青銅器銘文製作の分業形態について検討する。資料は、「地理的・時間的に同一の環境下で製作された可能性の高い器物群を検討対象とするのが理想である」(本書九〇頁)ため、婦好墓、花園莊東地五四號墓、戚家莊東地二六九號墓、大司空三〇三號墓といった同一墓から出土した同銘青銅器群を検討対象とする。銘文製作技法に關する先行研究を整理し、施銘の段階(原型・鑄型)、銘文の種類、原型の素材、内容(具體的な方法^③)などの項目別に表にまとめている。さらに「字形」、「字體」、「書體」の用語については大西克也氏の定義に従うとした^③。以下、個別事例の検討を進める(第一節)。

まず、殷墟二期後半の婦好墓青銅器群について、「婦好」銘の字體に基づく分類を行う。次に、先行研究でセット關係

をなすと指摘された青銅器の器種・形式ごとに、「婦好」銘の字形・字體の對應關係に基づき分類を行う。その結果、グループごとに施される「婦好」銘の字形・字體の異同の組み合わせにバリエーションがあることを指摘する。器物そのものの製作と銘文の製作とが聯携していない段階にあると述べる（第二節）。

次に、殷墟二期末の花園莊東地五四號墓青銅器群では「亞長」銘、三期後半の戚家莊東地二六九號墓青銅器群では「爰」銘、四期前半末の大司空三〇三號墓青銅器群では「馬危」銘といった最も多くみられる字銘を取り上げ、それらの字體・字形をもとに分類し、器形や紋様との對應關係について分析する。二期末以降、青銅器の器種ごとに銘文の字體が選擇される現象が見られ、銘文製作が組織化したとする。また、青銅器群の製作が ① 爵・觚、② それ以外の容器類、③ 武器類の三つに分かれていた可能性を指摘した。とくに花園莊東地五四號墓について、武器は紋様の有無と銘文の字體差が對應し、武器本體・紋様を含めて同一のモデルに従って複数個體を生産していたのに對し、容器類ではそうした關係が見られず、施紋工程と施銘工程が獨立しており、容器類と武器類とで分業がおこなわれていたと述べる。このようなあり方は、殷墟四期まで繼承されたとした（第三・四・五節）。

こうした分析を踏まえ、殷墟遺蹟からこれまで出土している鑄型の全體的な分布状況を時期別に検討する。殷墟後半期の工房・工房区のいくつかは、器種による製作場所の分化が進んでおり、前節までの青銅器の検討の結果を裏附けているとした。一方で殷墟初期から続く工房は、後半期になっても特定の器種に偏らない生産を繼續していたようである。このように殷墟遺蹟の青銅器生産は地點によって、生産のあり方が異なる工房が併存していたとした（第六節）。

なお、本章の中でも「婦好」墓とそれ以外の墓出土の青銅器群とで分類対象や分析手法が統一されているわけではなく、青銅器群ごとの通時的な對照比較ができていいるとは評者には思えない。また、本章で検討した「婦好」墓とそれ以外の墓は、明確な階層差があることが想定できる。著者が指摘する「婦好」墓とそれ以降の青銅器群と生産のあり方の差異は、時期差のほかにも階層差を反映したものである可能性も考慮すべきであろう。

第五章では、前章で述べた、容器類と異なる生産のあり方が見られた青銅武器について、同銘青銅武器群の集成にもとづき、銘文どうしの對比を中心に検討する。その結果、殷後期の青銅武器は、鏡文字が頻繁に用いられることや線対稱が意識されていること、原型への陰刻法が紋様製作と共通している点などから、銘文製作と紋様製作との共通性を指摘し、両者が同一の製作者である可能性を述べる。また、同一器形で同一銘の武器は字體レベルでもほぼ一致するケースが多いことを指摘し、花園莊東地五四號墓青銅器群で見られた現象は殷墟後半期を通じて採用された生産のあり方とした。武器の場合は容器と異なり、一つのモデルにもとづいて製作され、銘文に對する意識が武器と容器とは異なっていたとする。

第六章では、前章までの個別研究の成果をもとに、殷代青銅器生産における分業のあり方と生産の變遷を述べる。前者について、第一章で述べた、①工房内における工程分業、②用途・器種による工房間あるいは工房區内分業、③遺蹟間分業の三段階に關して、①は殷墟青銅器のうち、容器は施紋・施銘が別工程であるのに對し、武器では両者が同一である点（第四章・第五章）、②は殷墟遺蹟において、青銅器群の製作が、爵・觚とそれ以外の容器類、および武器類の三つに分かれていた点（第四章）、③は鄭州商城、河北・河南一帶、盤龍城遺蹟の關係がそれぞれ相當するといふ（第二章・第三章）⁴。後者については、殷前期において緩やかに各地でおこなわれていた青銅器生産が、殷後期には殷墟遺蹟にほぼ集約化されたとした。ただし殷墟遺蹟内においても工房間での分業の様相が異なり、中央による一括管理というよりも、やや緩やかなものであった可能性を提示した。

三 本書の意義

本書では一貫して青銅器の生産をテーマに各論を展開する。第二章・第三章で取り上げた殷代青銅器の在地生産に關しては多くの先行研究があるが、著者は範線構造や鑄掛といった製作痕蹟を含めた青銅器が有する複數の屬性の分析、ならびに冶金關聯遺物の集成に基づき、こうしたテーマに挑んでいる。とくに盤龍城遺蹟の青銅器が「鄭州系青銅器」と「非

鄭州系青銅器」に分かれ、在地生産品とそれ以外のものが共存した様相であったという指摘は、學史上においても重要である。

また、第四章・第五章の銘文を「考古資料」として活用し、青銅器生産の實像に迫った内容も、方法論も含め、殷周青銅器研究において意義を有するものと考ええる。とくに武器銘で同一字形が用いられるという現象を手掛かりに、武器類と容器類の生産の差異を追求した點は、新たな研究視角を含めた内容であり、大變興味深い。

なお、著者が取り上げた工程別分業や用途・器種別分業に關しては、近年、常懷穎氏による生産遺蹟の檢出遺構・遺物の分布論的検討⁽⁵⁾、また、石谷愼氏、著者、廣川守氏による青銅編鐘の銘文・紋様などの屬性の規格性の検討によつても議論されている。本書の青銅器生産に關する研究は、こうした最近の研究動向を踏まえたものであると言えるかもしれない。このような意義を有する本書であるが、評者は内容に關していくつかの問題點があると考えており、次節にてその點に關して整理する。

四 本書の問題點

(一) 本書全體の構成について

本書では、第二章・第三章では殷前期、第四章・第五章では殷後期を扱い、通時的な青銅器生産を扱う著者の意圖が窺える。しかしながら、第二章では爵、第三章では爵・鼎・罍といった容器類、第四章、第五章では銘文を主な検討對象としているほか、目的もまったく異なっている。第四章のなかでも「婦好」墓とそれ以外の墓出土の青銅器群とで分類對象や分析手法が統一されているわけではない。殷代における青銅器生産體制の通時的な變遷を目的とするのであれば、共通した方法論・資料を用いた比較検討のうえで體系化をすべきであろうが、残念ながら本書ではそれは達成できていない。

本書はいわば「論文集」としての意味合いが強い。

なお著者は内田（難波）純子氏の一聯の殷代青銅器研究に對し、「紋様研究だけでは殷周青銅器の製作者たちのすべてを描き出すことは難しい」（本書二三頁）とし、「本書では殷周青銅器特有の紋様以外の屬性、つまり器種・器形や銘文などに關する検討も試みることで、製作者全體の様相の復元を試みる」（本書三三頁）としているが、こうした方法を実践してきたのはほかならぬ、内田純子氏であると評者は考える。内田氏の研究は、著者の述べるような紋様に偏重したものは決してなく、紋様とともに各器種の形態、さらに鑄型構造や銘文などの要素も踏まえて編年を構築し、製作者集團、すなわち「流派」の抽出を試みたものであると理解する。殷前期と後期とで検討對象・方法・目的が共通しない本書とは異なり、殷代を通じて共通した分析手法で青銅器生産を検討したのが内田氏の研究である。本書の「まとめ」である第五章でも、内田氏をはじめとした研究者の提示したモデルとの對比がおこなわれておらず、先行研究との違いもあきらかにできていない。著者が殷代における青銅器生産體制の復元を目指すのであれば、いま一度内田氏をはじめとした先行研究で積み重ねられてきた成果について、方法論を含め、再検討することが必要ではないかと考える。

（二）「生産」と「分業」について

本書では題目に掲げられた「生産」と「分業」が大きなテーマとなっている。しかしながら、肝心な用語の整理が不十分であると考ええる。

そもそも本書の題目となっている「生産體制」という用語は、「はじめに」、本書二頁の「殷とその遺蹟」、および本書二一―二二頁の「問題の所在」の部分で散見するのみである。そのほかでは、本書の結論となる第六章を含め、「生産のあり方」と述べている。なぜ本書題目に「生産體制」があるのか、評者には理解ができなかった。なお本書でも参考文献として引用している、彌生時代北部九州の青銅器生産體制を検討した田尻義了氏の著書『彌生時代の青銅器生産體制』で

は、「生産體制」を「具體的な生産組織の管理形態」と定義し、「生産組織は①技術を保持する製作者と②生産用具（道具）と③原材料と④製作場の有機的な結合で構成され、それらの諸要素の管理形態が規定された實態として「生産體制」という用語を用いる」として、①②③④を考古資料からどのようにアプローチするかを整理する。⁸本書で扱う殷代の青銅器も、田尻氏の著書をはじめとした關聯する先行研究の定義を参考にして、生産體制論を展開することも可能であったのではないであろうか。

また、もう一つのテーマである「分業」に關しても、先に指摘した通り定義に混亂があるのみでなく、生産體制を構成する様々な要素のうち、なぜ「分業」を取り上げたかの説明も乏しい。「分業」に關しては、主に國家形成論のなかで、文獻史學・考古學をはじめとした多くの先行研究で議論がなされた問題である。特に分業形態の分類を考えるうえで嚆矢となるのは、日本史學における石母田正氏の研究であろう。石母田氏は、マルクスの『資本論』等の文獻に基づき、分業の形態を①一般的分業（農業・手工業・商業などのような大きな屬への社會的生產の分割）、②特殊的分業（たとえば手工業部門がさらに細かく種および亞種に、たとえば鍛冶・木工・陶工等等に區分される形態）、③個別的分業（一作業場内部の分業）に分類し、①②を「社會内分業」、①②③全體を「社會的分業」とした。さらには③については官營作業場を具體例として、「一箇の製作物を完成させるために、種類を異にした多くの工匠または労働者が、同一または聯絡ある作業場に集つて、労働する形態」と「同種類の多數の労働者が、たとえば織部司に上番した織手たちや、造兵司で矢を製作する工匠の場合のように（『延喜式』）、同一の作業場で労働するさいにみられる形式」に分類する。⁹考古學の立場から生産體制における分業の進展を考えるうえでも、石母田氏をはじめとした先行研究における分業論の整理、ならびに考古學的な現象と對比するうえでの方法的な整理が必要ではないかと考える。

なお石母田氏は、「官營作業場における前期の畫工や畫師にみられる労働過程の分割Ⅱ分業は、緊急かつ大量の生産物を必要とした特殊な條件から生まれた形式である」とし、「工程別分業」のなかには一時的に生じたものが存在すること

を指摘する。本書第四章で想定した施紋工程や施銘工程の獨立といった「工程別分業」が恆常的なものか、あるいは一時的なものかによって、殷代における青銅器生産の評価が異なるといえるであろう。

(三) 青銅器生産體制復元のための方法論について

本書では殷代を通じて青銅器の生産をテーマに議論をおこなっているが、評者には、著者が第三章でおこなった青銅器の複數器種の形態・紋様・製作技術といった屬性の比較検討を、殷代全體で展開することが重要ではないかと考える。こうした基礎的な作業の蓄積にもとづく生産體制論は、青銅器に限らずさまざまな考古資料の研究で知られている。^⑩特に青銅器が有する屬性のうち、著者が取り上げた範線構造のほか、加筋筋(筋狀痕蹟)の形態、スパーサーの使用法、湯口の位置などの要素は製作者集團の特徴を反映している可能性があり、これらの地域性が抽出できれば在地生産の解明につながることも可能となろう。^⑪こうした特徴は實資料を観察することであきらかになるものが多いが、近年は中國においても實資料へのアプローチが以前よりも容易となり、現在の中國考古學研究は、より資料の實態にもとづいた調査・研究の段階に移りつつあるといえる。實際に本書第三章で盤龍城遺蹟出土青銅器の實見で得た成果を検討に生かしたように、より多くの青銅器の實見データの蓄積が當該期の青銅器生産體制の解明につながると考える。

なお本書が提示した方法論の問題點も指摘したい。著者は工房間分業の検討方法を説明するなかで、「器種・用途による分業が認められず、遺蹟内の複數の工房から出土する鑄型をみてもすべて對等であり、製作器種による分業は存在しなかったという可能性」(本書二五頁)を述べる。この場合、一つの製作場で使用されたすべての鑄型がその場で廢棄され、考古遺物として出土することが前提となるが、そのような可能性は極めて低いであろう。

また、青銅器の製作據點を考えるうえで「鑄型は青銅器製作以外での使用法が考えられない」(本書二七頁)ことから鑄型を青銅器製作のおこなわれた場所の第一の指標とし、鑄型など鑄造關係遺物と鑄造關係遺構がともに檢出されたものを

「工房」とする。ただし、先に引用した田尻氏の『彌生時代の青銅器生産體制』では、先行研究における「鑄型の出土Ⅱ青銅器の生産」という考古學的類推の危険性を指摘し、青銅器鑄造地の認定條件として

a. 鑄型が一個體だけでなく複數個體出土していること。

b. 鑄型だけでなく鑄造に關聯する遺物が出土していること。

c. 鑄造に關聯する遺構が確認されること。

の三點を想定し、彌生時代北部九州の各地域の青銅器生産の有無について詳細な検討をおこなっている。⁽¹²⁾ また、青銅器生産がおこなわれた場のなかでも、出土鑄型量の少ない遺構や短期に操業を中止した場所が含まれる可能性を加味し、「工房」ではなく「青銅器製作場」、「製作場」という用語を使用する。⁽¹³⁾ こうした田尻氏の議論と比較すると、本書で提示した鑄造場所の認定基準や用語については、今一度再検討の必要があると考える。

(四) 青銅器生産の歴史的な位置づけ

最後に評者が最も疑問に感じたのが、著者が何をあきらかにするために青銅器の生産やその分業について取り上げているのが不明な點である。青銅器生産のあり方は、當該期の社會、あるいは國家形成や社會進化とも密接にかかわる問題である。例えば、岡村秀典氏は、商周社會の特質を「祭儀國家」と位置づけ、青銅器生産活動も含め社會や經濟が祭儀システムに埋め込まれたあり方を提示している。⁽¹⁴⁾ 松丸道雄氏も、西周青銅器銘文の製作が王朝と諸侯との君臣關係を具象化した紐帶的な役割を果たしていたことを指摘する。⁽¹⁵⁾

このような先行研究が提示した社會像と青銅器生産に關する本書の成果とを突き合わせ、歴史的な位置づけをあきらかにすることが必要ではないかと考える。

五 おわりに

以上、本書の概要と意義、およびいくつかの評者の意見を開陳した。僭越ながら問題点も述べたが、考古學的手法で青銅器生産の検討を試みた著者の研究は、青銅器研究の學史上においても意義を有するものである。著者が提示した見解を再検討することは、評者を含む青銅器研究者に課せられた課題であろう。

本書刊行後、著者は第四章・第五章で扱われた銘文の製作技術について、レプリカ法や鑄型製作・鑄造實驗などの手法を駆使し、さらなる研究を進めている。¹⁶⁾

著者の研究の更なる進展を期待するとともに、小稿における評者の淺學非才による誤解をお詫び申し上げたい。

註

- (1) そもそも盤龍城遺跡遺蹟における獨自の青銅器生産を、鄭州商城との遺跡間分業によるものと捉えることに評者は大いに疑問を覺えざるを得ない。
- (2) 評者は、著者の用語の定義についても問題があると考え、全體にかかわるものであるため、「四、本書の問題点」で後述する。
- (3) 大西克也・宮本徹編 二〇〇九『アジアと漢字文化』放送大學教育振興會。
- (4) 註(一)で述べた通り、評者は③遺跡間分業については、そもそも「分業」といってよいのかも疑わしいと考える。
- (5) 常懷穎 二〇一三「鄭州商城鑄銅遺址研究三題」『三代考古』第五號。常懷穎 二〇一三「侯馬鑄銅遺址研究三題」『古代文明』第九卷。
- (6) 石谷愼・鈴木舞・廣川守 二〇一五「紋様と銘文の規格から見た虬氏編鐘の製作體制」『FUSU』第七號。
- (7) 難波純子 一九八九「初現期の青銅彝器」『史林』第七二卷二號。難波純子一九九〇「殷墟前半期の青銅彝器群の編年と流派の認識」『史林』第七三卷六號。難波純子一九九一「婦好墓の青銅器群と流派」『泉屋博古館紀要』第八卷。難波純子一九九五「殷墟後半期の青銅彝器(上)」『泉屋博古館紀要』第一一卷。難波純子一九九六「殷墟後半期の青銅彝器(下)」『泉屋博古館紀要』第一二卷。

- (8) 田尻義了 二〇一二 『彌生時代の青銅器生産體制』九州大學出版會 二〇頁。
- (9) 石母田正 一九六三 「日本古代における分業の問題——一つの豫備的考察——」『古代史講座』第九 學生社。
なお石母田氏の分類に對しては、原秀三郎氏による批判もある。原秀三郎 一九八〇 『日本古代國家史研究の理論的前提』『日本古代國家史研究——大化改新論批判——』東京大學出版會。
- (10) 拙稿でもこうした方法論について若干の整理を試みたことがある。丹羽崇史 二〇〇六 「春秋戰國時代華中地域における青銅器生産體制復元のための基礎的検討——青銅鼎の製作技術の分析から——」『中國考古學』第六號。丹羽崇史 二〇〇八 「製作技術からみた戰國時代江漢地域出土青銅鼎——包山二號墓・天星觀二號墓・望山一、二號墓出土青銅鼎の検討——」『九州と東アジアの考古學——九州大學考古學研究室五〇周年記念論文集——』。
- (11) 丹羽崇史 二〇一五 「X線CTと中國青銅器製作技術研究」泉屋博古館・九州國立博物館編『三次元デジタル計測技術を活用した中國古代青銅器の製作技法の研究』。
- (12) 田尻義了 二〇一二 『彌生時代の青銅器生産體制』（前出）七三頁。
- (13) 田尻義了 二〇一二 『彌生時代の青銅器生産體制』（前出）二二・二三頁。
- (14) 岡村秀典 二〇〇五 『中國古代王權と祭祀』學生社。
- (15) 松丸道雄 一九八〇 『西周青銅器製作の背景——周金文研究・序章——』松丸道雄編『西周青銅器とその國家』東京大學出版會。
- (16) 鈴木舞・三船溫尙 二〇一七 「殷周青銅器銘文の製作法——銘文レプリカの顯微鏡觀察と製作實驗による検証——」『アジア鑄造技術史學會 研究發表概要集』一一號。

二〇一七年五月 東京 六一書房
二七糧 一一・一二〇九 九、〇〇〇圓十稅